

「USR型社会貢献モデルの創出・実践」

実施報告

本学は、2006年度に現代GPの採択を受け、チャレンジセンターを拠点に、USR型社会貢献を通じた人材育成に取り組んできました。本シンポジウムでは、3年にわたる本取組の成果を発表し、地域活性化に取り組んでいる外部有識者からの評価をいただくとともに、本学が推進するUSRの新たな展望を探りました。

●日時： 2009年3月6日(金) 13時30分～15時30分

●参加者： 73名(学生20名、教職員43名、一般10名)



プログラム

■「東海大学型USR社会貢献モデルについて」

高野二郎(東海大学学長代理)

■USR型人材輩出のための教育プログラム

大塚 滋(東海大学チャレンジセンター所長)

■学生によるUSR型社会貢献プロジェクト活動の紹介

「障害者自立支援プロジェクト」

金内俊介(工学研究科電気電子システム工学専攻
大学院2年)

「日本縦断キャラバン隊北ルート」

西脇智宏(工学部動力機械工学科4年)

「日本縦断キャラバン隊南ルート(環境キャラバン隊)」

横川敦史(工学部機械工学科3年)

井下原元(教養学部人間環境学科1年)

「ビーチライフ創生プロジェクト」

高市慎太郎(政治経済学部政治学科1年)

「高齢者いきいきプロジェクト」

井上貴洋(体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科3年)

■USR型社会貢献の意義

杉浦裕樹(NPO法人横浜コミュニティデザイン・ラボ 常務理事)

宮島真希子(神奈川新聞社報道部 記者)

■現代GPへの取り組みの総括

飯塚浩一(東海大学チャレンジセンター次長)



シンポジウム要旨

高野二郎学長代理からは、「東海大学型USR社会貢献モデル」について、「現代社会には課題が山積みであり、世界に通用する人材を学科の教育だけでは育成しきれないのが現状である。さらに、多様な学生に対しては多様な教育支援をしていかなければならず、その拠点としてチャレンジセンターを設置し、大学の社会的責任としての社会貢献モデルを実践してきた」との報告がありました。

また、大塚滋チャレンジセンター所長からは、「USR型人材輩出のための教育プログラム」について、「[集い力][挑み力][成し遂げ力]の3つの力を育成するシステムとして「プロジェクト活動」と「チャレンジセンター科目」の連携を実践しており、その連携を支援する手段として、SNS、ナレッジマネジメント、アクションラーニング、セミナー・シンポジウムにも取り組んでいる。USR型社会貢献モデルとは、プロジェクト活動の成果として直接的な社会貢献だけにとどまらず、そうした活動に取り組む社会貢献マインドを持った人材の輩出を含めて定義している。」との説明がなされました。

次に「学生によるUSR型社会貢献プロジェクト活動の紹介」として、5つのプロジェクトの活動内容についてプロジェクトに参加した学生がプレゼンテーションを行いました。

学生からの活動成果発表を受け、本シンポジウムのゲスト・コメンテーターである杉浦裕樹氏からは、ご自身が現在取り組まれている活動を例に出しながら地域活性のあるべき方向性について以下の評価をいただきました。

『自分は、現在「地域情報化」に関する活動をしており、コミュニティ・デザインを行っている。「地域情報化」とは、価値ある人、組織、拠点、プロジェクト等の所在情報を社会の「共有財」にする活動である。そして、コミュニティ・デザインとは、同じテーマに関心のある地域の人をつなげていく活動である。プロジェクトの取り組みを社会へ発信していくためには、プロジェクトそのものの企画が持っている「デザイン」が優れていると良い。その点で、ビーチライフ創生やキャラバン隊は評価できる取り組みである。また、学生が培う力を「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」として分かりやすくまとめている点も評価できる。しかし、実際のプロジェクトはなかなかうまくいかないことが多い。私はプロジェクトを進めていく上では、「寛容性」というキーワードが重要だと思っている。そして、継続的な活動は、プロジェクトにかかわる個々人が責任を持つことから始まると思う。』

もう一人のゲスト・コメンテーターである宮島真希子氏からは、以下の評価をいただきました。

『自分は、神奈川新聞で「カナロコ」というサイトを立ち上げ、その後「ハマっち! SNS」の立ち上げにも携わった。学生からの活動発表で共通していた課題の一つに「参加者が増えない」ということが挙げられていたが、ICTをもっと利用すれば改善の余地があると思う。また、「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」という3つの社会的実践力にあえてもう一つ必要な力を加えるとするならば「発信力」が必要ではないか。そして、社会貢献活動を行う際には、自分たちが活動を通じて「どんな社会に変えていきたいのか」をしっかりと議論し、その実現に向けて一人一人が活動の意義を理解していることが真の社会貢献だと思う。なお、社会貢献の評価は事前事後の調査を行うとともに、それをしっかりと分析し、成果をまとめることが重要である。』



本シンポジウムの成果

3年間にわたる活動の成果として、多様なプロジェクトが融合したUSR型社会貢献プロジェクトを5件発表できたことは大きな成果といえます。プロジェクト活動の内容は、「障害者支援」「外国籍児童の就学環境改善」「環境問題の啓発」「地域活性」「抗加齢分野の健康推進」など多岐にわたり、総合大学である本学ならではの取組といえます。

発表した学生にとっては、プロジェクトの活動そのものを省察し、参加学生への「意味づけ」とともに、社会への「意味づけ」を深く掘り下げる機会となりました。

来場者の主なコメント

- 外部の専門家からの客観的な評価が聞けてよかった。
- シンポジウムを契機に連携を広げられると良い。
- 社会貢献の形はそれぞれあると思うので、出来る分野で取り組むことが素晴らしいと思った。
- 学生のプレゼンテーションが短い時間の中でよくまとまっており、素晴らしかった。
- 時間的制約もあったと思うが、一つ一つの取組みについて、もう少し踏み込んだ意見や感想が聞きたかった。
- 地域の課題、社会的背景を踏まえて、地域の活性化を住民とどのように取り組んでいくかに興味があって参加したが、学生の事例発表を通じて一緒に取り組む意義を学んだ。

3年間を通してのシンポジウムの成果

3回にわたるシンポジウムを通して、以下の成果が得られました。

- プロジェクト活動に基づき、行政・企業・NPO/NGO・学生・大学、それぞれの立場から社会貢献のあり方についての意見を相互に確認できた。
- 学生と学外の諸機関との連携については、常に「継続性」が課題となるが、目に見える成果の追求だけでなく、「学生教育への参画」と「関わる側も自らの成長の機会である」という、連携に対する位置づけの深まりが感じられた。
- CSR活動の進展や市民が参加する行政のあり方、大学が行う社会貢献活動について、改めて考えるきっかけとなることができた。
- チャレンジセンター開設前と開設後における地域や企業との連携状況について検証し、「教育効果」「連携の成果」の両面から評価体制を整備していくために参考となる意見をいただいた。

今後の事業への展開

現代GPの事業としては、本年度で一つの区切りとなりますが、本学では「学生に対する教育効果」と「社会貢献」をマッチングした教育プログラムの実践を「USR型社会貢献」として位置づけ、チャレンジセンターを拠点として今後も引き続き展開していく予定です。